

## 『医談抄』の鍼灸

寺川 華奈

日本鍼灸研究会

『医談抄』は、鎌倉後期の宮廷医・惟宗具俊の医学随筆集である。具俊の生没年は未詳であるが、弘安五年（1282）に『節用本草』を、同七年（1284）に『本草色葉鈔』を著していることから、弘安年間（1278～1287）の人である。『医談抄』は医家による随筆としては最古のものの一つであるとともに、中世の医療や鍼灸の状況を伝える史料としても貴重である。以下、本書の鍼灸条文について検討し、鎌倉後期の鍼灸研究の一助とする。底本には『杏林叢書』上巻所収本を使用した。

本書は上巻の「脈法」二篇、「鍼灸」十六篇、「藥療」九篇、下巻の「雜言」三十二篇により構成されている。この「脈法」から始まり「雜言」に至る流れは、上古から具俊の時代への時間的変遷と重なっている。診脈に関して「漢朝の良医の掌をさす事は皆、靈道の人なれば何をか相違あるべき」とあるように、脈も鍼も上古のものであるが、当時行われていた灸や藥療もまた同じく黄帝や神農といった聖人に結びつくものとする認識を示している。各篇は概ね正史、医書、類書、あるいは医学随筆などからの引用を行うとともに、具俊の所感を述べる形式を採っている。

本書における鍼の記述は主に「鍼石起事」「鍼殺生人事」「上古鍼術驗事」「火鍼事」の四篇十三条に見える。これら諸篇に見える引用や言及は、『素問』『太素経』『諸病源候論』『外台秘要方』『太平聖恵方』『医説』、ならびに『史記』『三国志』『山海経』『太平御覧』『太平広記』の十一書目であるが、特に「上古鍼術驗事」全十条では、『医説』巻第二・鍼灸からの引用がその七条を占める。その論述内容は、①鍼の起源、②鍼の危険性、③宋以前の鍼術の効験の三点にある。「鍼殺生人事」で「鍼術は絶ぬれば用いられず」と述べていることから、具俊の時代には鍼が殆ど行われていないことが伺えるのであるが、それに続く「上古鍼術驗事」では多くの治験効験の例を列挙していることから、具俊の意図は廃れてしまった鍼術の再評価にあるようにも見える。治験例で採り上げられている病證には頭重痛、身熱、頭眩、手不得引、疣贅、脱肛、傷寒反胃嘔逆食不下、腫物、難産や死胎、あるいは鬼神（靈）の腰痛など様々である。その手法は出血、腫れ物に対する「烙（火鍼、燔鍼）」、および現在の運動鍼に類似したものもみられる。なお、中国医書の引用に加えて我が国の平安期の医家である丹波頼基や和氣定成の鍼法治験についての記述が見られることも興味深い。

灸の記述は「灸起事」「療不如灸事」「灸時刻時」「追日可灸事」「脚気灸事」「灸有補寫事」「灸不爛事」「阿是灸事」「孔穴寸法事」「艾炷事」「灸鳴走事」「壯数事」の十二篇に述べられている。「療不如灸事」に「凡そ鍼灸を共に行うを良医とす」と述べながら、鍼の場合に比して、篇数が三倍に及ぶことに、古代以来の灸法中心主義の名残が強く感じられる。これら諸篇に見える引用や言及は、『千金方』『太素経』『明堂経』『外台秘要方』『太平聖恵方』『医説』『鍼灸資生経』『易簡方』『濟世方』、並びに『左伝』『孟子』の十一書目であるが、従来からの隋唐医書と新渡来の宋代医書の混交と併存の状況を見て取ることができる。論述の内容は、灸穴、「末代までも療治の第一」とする灸法への賞賛、脚気灸法、施灸における補寫と灸痕の爛れ、阿是、孔穴寸法、艾灸の大きさや壯数など、詳細にわたっている。

『医談抄』における鍼灸条文は、なお濃厚に隋唐鍼灸の趣を遺してはいるものの、当時行われることの少なかった鍼法についての治験例を諸書より多数引用して称揚し、新渡来の宋刊本を徴引し、また『医心方』以来の人神などの鍼灸禁忌に関わる制約から解き放たれていることなどのなかには、古代鍼灸を脱した中世鍼灸の胎動が感じられる。